



170年の間、絶やすことなく受け継がれる「灯」^ひ

平谷の流したいが行われました (町無形民俗文化財 昭和63年2月12日指定)

「平谷の流したい」は、毎年7月14日の夕方、平谷地区大井川河原で行われる年中行事です。麦わらと竹で作った「たい」に火を灯し、祈りを捧げて川に流します。

文政11年の夏に発生した大洪水によって、各地で大きな被害や疫病が発生しました。怖れた住民たちは災厄から逃れるため、また、犠牲となった人々の霊を慰めるために流灯し、水の神に祈ったのが事の始まりと言われています。

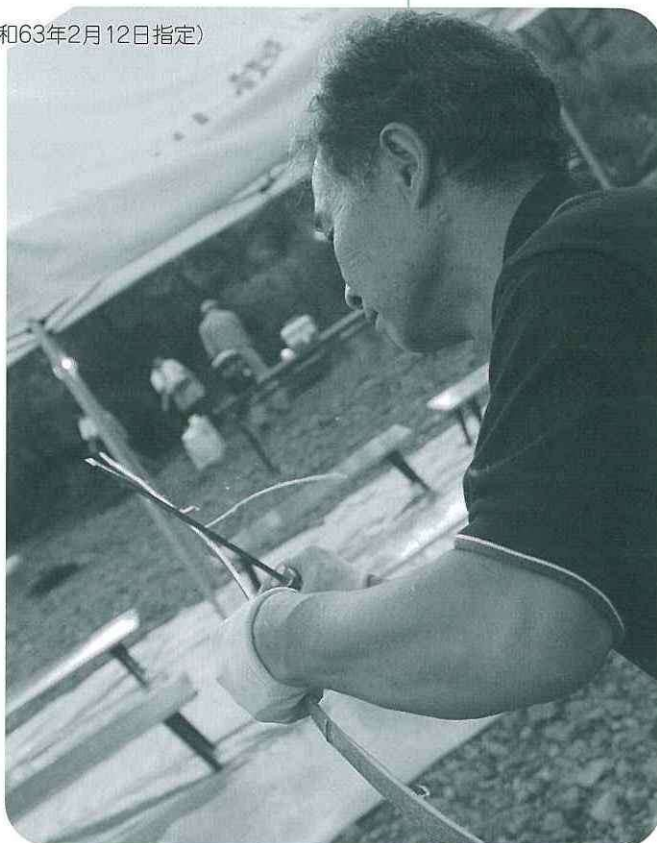
この行事は、現在までに170年間一度も欠かさず続けられました。戦争の最中であっても、その火を絶やすことはなかったそうです。

会場となった、平谷の大井川河原には、地元自治会の方々を中心に約80人が集まり、午後4時半頃から「たい」づくりが始まりました。高さ3メートルほどもある大きな「たい」が住民の手で組み上げられていきます。

その慣れた手つきは、まるで職人の技を見ているかのよう、見る間に1本の竹が形をなしていきます。

また、当日は、中川根南部小の児童たちも40人ほど参加して、一回り小さい「ミニたい」を地元の方に教わりながら一生懸命作っていました。

2基のたいは1時間半ほどで仕上がり、火を灯され、参加者全員で祈りを捧げました。



まるで職人技の雰囲気、「たい」づくり

そして、地元の方々と児童たちの手によって川に運ばれた「たい」は、夕闇の迫る大井川をゆっくりと下っていきました。

来賓として出席した澤村教育長は「3世代、4世代の住民の交流の場です。今後も火を絶やすことなく続けていって欲しい」とあいさつしています。

たいを流し終えたあとは、地区の交流の場でもある、なごやかな親睦の始まりです。地区の女性陣が支度してくれたバーベキューなどに舌鼓を打ちながら、楽しい笑い声が夜の平谷地区に響きわたっていました。



火を灯した「たい」が大井川に流されます



流れていく「たい」と中川根南部小の先生
ビデオはきれいに撮れました？



中川根南部小の児童たちも一生懸命つくります

川根町

風車

かが希

川根町上長尾

☎ 56-0110